

## 東日本大震災見舞記

杉野信博

実は本誌1号に「仮想随談——透析室のDVと寅さん——」という短文を書いた。まさかその後に大地震が襲うとは思わないので、あんな呑気な記事を災害後に出た本誌に載せてしまった。被災地で大苦闘をされている先生方には誠に相い濟まないと思ってお詫びのつもりで追加させて頂く。

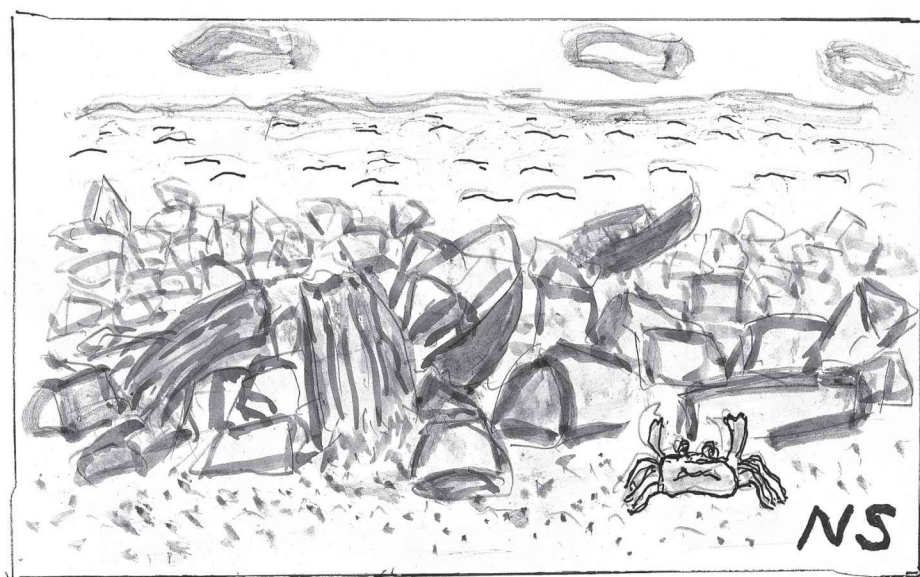
東北沿岸災害中心部では医療施設も大被害を受け、医師、看護師の一部の方も犠牲となられた。また地震後もかなりの期間、医療が不可能の状態が続き、とくに透析医療は停電、断水、機械の破損、薬品不足で中止せざるをえない状況が続いた。この間の先生方の患者さん達への手配、運搬など大変なご苦労であり、心身共に疲れ果てたこととお察しする。

幸い地震後間もなく3カ月になる今日、都内のわれ

われの施設に臨時透析に運ばれた患者さん達も徐々に地元に戻られて、お元気の便りを頂くことも増え、なんとか光が見えてきたように思う。

従来の大地震は比較的地域限局的で災害が余り長期にならず、支援する側も困難が少なかった。しかし今回のような強度な地震、大津波、原発施設の破壊による放射能汚染が広範囲の地域に及び、収束にも多大な日月を要することは始めてである。しかしこの小さな島国に三重苦の災害が起れば大国の米国、ロシア、中国などと異なり未曾有の国難となる。今後二度とかような大災害にならぬよう防止策を講じなければならない。

今回の東日本大震災に対して諸外国からも支援を受け官民一体で感謝しているが、筆者にも欧米の友人数



名の医師達から見舞のメールや手紙を頂いた。その中の UCLA 内科 JD Kopple 教授からのメールを 1 例として「北米腎医からの激励メッセージ」の題で『腎と透析』（第 70 巻 4 号）に紹介した。要点を述べると、多くの米国医師達は災害直後の被災地日本人の冷静、沈着、秩序、品格など 10 項目をあげ、「われわれも日本から学ぶべき点であり、日本の復興を固く信じている」と激賞している。

このような意見を支えに、被災地の先生方が 1 日も早く平常の診療態勢に戻られるよう祈願する。

夕食の後、TV で被災地の復旧状況を眺めていたが、

多くの作業員、ボランティアの方々が被災海岸で懸命に清掃作業をしておられ眼頭が熱くなった。その中に網膜像に何処からか石川啄木らしい人物が海岸に現われ人々の中に紛れてしまった。そして間もなく次のような歌が聞こえてくるような気がした。

倒壊の

みちのく磯の

白砂に

われ泣き濡れて

瓦礫と闘う

先生方の今後の御健勝と多幸を祈り。